
KOUAN.9-KA【マテバの弾道】

士功征宗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KOUAN・9・KA【マテバの弾道】

【NNコード】

N3089A

【作者名】

土功征宗

【あらすじ】

公安9課に所属するトグサ。彼の閉じたファイルにある小さな捜査記録 攻殲機動隊のFF 個人的には原作本が好きです

#0-1 (前書き)

原作本、劇場版、（人形使い）とTV版（次元別構成）の内、今回本作はTV版を基盤と構成のファンファイクションです。（原作、劇場はストーリー基盤は同一だがキャラ設定が多少異なる）尚、キャラの詳細、また描写は詳しく構成しません。又、近未来思想の設定につき、一部、固体名は不明な部分が御座いますので、作者の単独で構成します。（現に原本の断りにこれらは妄想の産物で現実とは無関係の娯楽物である）

超高層化されたビル群からは夜の曇り空を貫くまでに光が伸びていた。

隙間に影を落し、そこから放つ籠もつた光と、それに反射した幾つにも突起したコンクリートの光る塊は差し詰め摩天楼といつところである……

『攻殻機動隊S・A・C』

公安9課・t o g u s a · (m i s s i o n) F i l e

#01・【マテバの弾道・1】

新浜県。2030。

中心部郊外の廃工場敷地内……

一帯の空気を引き裂いて弾ける轟音はとめどなく響く。

固定式の自動小銃が熱せられた黄金色の鉄片を落し、それがアスファルトに強弱の付いた音色を奏でていた。

一見、無作為に放出されている弾筋は一つの方向へと規則的に放たれ、火薬が着爆し、薬莢が次々弾け飛んでいく度に発光するフラッシュが車体を朧に映し出す。

それが、ある者達にとつては全体像をハッキリとさせていた。

ダダダダダッ、ダダダダダッ……

「……少佐。これじゃ限りがねえ」

物影に姿を隠し、止まない銃撃を交わしていたバトーと素子。互

いにAI通信を図っていた。

「それもそうねえ」

「武装以外無傷ってのは、無理があるだろ」

一人とも長く硬直したためか痺れをきらし始めていた。

「ひつなつたら、やるしかないわねえ……」

素子が呟いた一言にバトーはその企みに気が付いた。

#01 (後書き)

攻殻機動隊のファンの読者様へ。この作品は十岐士郎の独断と偏見で創作したものですので、つまらない時は申し訳御座いません。又、固体名、構成、設定に準ずるプロセスなで誤りが生じた場合も申し訳ございません。

#02・【マテバの弾道・2】
企みに気付いたバトーはセブロM5（攻機用ハンドガンの名称）
を絞りだした。

「少佐……そりゃ まづくねえか！？」

バトーには、これから派手に始末をつける素子を予感させてならない。

「熱光学迷彩なら一気にケリが付くわ」

素子は銃を置き、ジャケットを脱ぎ捨てると、一気に身体全体が辺りと同化した。

「バトーは標的の銃口を引き付けさせて！」

そう言い残すと素子は物影から標的まで一直線に駆け出した。

「引き付け……つて、あれ？ もう飛び出したのかよ……まったく
氣の荒い姫様だ」

バトーはその大柄な身体を標的の前に現わし、銃口の矛先となつたのである。
案の定、二つの小銃が一気にバトーに向かった。

「……つたく、冗談じやねえよ」

バトーは愚痴をぼやきながらも、その卓越した身体能力で上手く弾撃を交わす。

その仕事に応えるかのよつて、高らかにジャンプをし、その標的に飛び付いた。

「うわ、おおおおおー！」

おたけびと共に、素子は渾身の力で固定され小銃を固定された鉄板ごと引きちぎった。

時折、振り落とされそうになつたが、なんとか持ち堪え、安全を確保するとその機体から飛び降り、バトーに高らかに叫ぶ。

「機動するー一つの足を破壊しろー！」

バトーは既に射的用意に入つており、躊躇わざ放つた弾道は見事に機動を止めた。

「お見事」

「おー、誉めてくれるの?」

「たまにわね」

素子等はその標的に近づくと、バランスを失い自在の聞かない機体を眺める。

「これ、作業用だからM5数発ブチ込んだだけで破壊できたが、軍用なら無理だつたなあ……てか、こっちの身体がバラバラだ」

そんな事をぼやいている時、小さな爆音が一人の耳を抜けていつ

た。

ボンツー!!

「……なんだ?」

素子は目を見開いて、舌打ちをしながら、その崩れた機体に飛び乗つたのである。

「しまった!」

と、同時に痙攣動作を小刻みに繰り返した機体は、以外に軽い音でその場に停止した。いや命を終えたに近かつたのである。

「A.Iを焼き切られたわ……」

すると、バトーが呟いた。

「やべえ……サル親父に雷食ひひつなこじや……

#03 (前書き)

訂正。#01の内容にて、『A-I通信』とあります。正しくは暗号通信。言い回しが違うでしょうが、同じ類。無線の周波数を変えて一特定との通信と思って頂ければと思います。但し、暗号化は盗聴傍受されないためのもの。説明間違っていたらすみません。私の力量では言葉が足りず、説明不足です。

#03・【マテバの弾道・3】

——9課内課長執務室。

「今回の武装は初めてのケースだな

9課をまとめる荒巻が冷静に語る。

普段は何気ない室内も9課の面子が揃うと異質な空間とも呼べる。

「今回の暴走事件どう思つ?」

多脚車両をメインに機械仕掛けのボックスが只単純に暴走しているだけの騒動。決して事件と言い難く、掛け句、公安が出てくるほどのモノではない。それが数件続いていた。

「この程度なら所轄の仕事でしょう。わざわざ俺たちの出る幕じゃない気が……」

トグサが呆れたとよに言葉を放つ。
しかし荒巻は違つた。

「以前にも似たような事件があつた。あれは確実にテロだつた。今回も安全とは言い切れん」

荒巻の視線はトグサを寫す。

「確かに未だ犠牲者ゼロは胸を撫で下ろせるが

「…………」

情報を集めていたイシカワやボーマもまだ手を拱いていた。

「おそらくは数十ヶ所からの中継を通して、さらに暗号化してハッキングを行っているから後が追えない」

荒巻は表情一つ変えてはいないが何かが引っ掛かっていて、つかえる違和感は否めない。

只、ロボットの暴走だけの事件に関わらず手口は功名。ハッキングも“あの男”とまではいかないが、天才的。

荒巻は田を開じ、じっとソファーに腰を落ち着かせた素子に田をやるが、声は掛けなかつた。

「まずは上からの解除命令が通達されない限り、我々の仕事をするまでだ。手筈は現状維持しておけ」

荒巻はそれぞれの任務に位置着かせた。

「イシカワはもう一度、前歴のある者を洗え」

トグサはこの時、まだ気付いていない。自身の感性は時と恐ろしいくらいに的を得る。そんな事とは知らず知らず中心に近付いくことに。

そして、その時からだった。些細な事件と投げつけていたトグサが徐々にこの事件の真相に迫っていく、真相心理の深みにハマったのは……

#04・【マテバの弾道・4】

あれから「これ」と言つた事件の連鎖もなく、日々が過ぎていた。
その中、荒巻は各自それぞれ捜査経過を聞くため、自ら9課メン
バーそれぞれの下へ足を運ばせていた。

「イシカワ。どうだ」

イシカワは暗い異質な部屋の椅子に深々と座り、親指と人差し指
で疲れた目を揉み解して言つ。

「言われた通りテロ思想をもつグループを調べましたが、おとなし
いもんです。過去の政治犯も同様これといって目立つ動きもなけれ
ば、声明もなくひっそりしますよ」

「……」

荒巻は眉一つ動かさず、イシカワの肩を一つ叩くとその場を去つ
た。

その頃、バトーレは一九二一やしながら格納庫をふりついでいて、手
にもつたオイル缶をぐるぐる回しながらタチコマに近づいていく。

「おー、タチコマ。いこもんくれてやる

「バ、バトーレさん… それは…」

「察しの通り、天然オイルだ」

「ヤツホーー！」

タチ「マの歡喜の声とともに辺りは御祭り騒ぎや。」

その時だつた！

「バトーー」

荒巻の低い声が、いきなりバトーーの真後ろから聞こえてきた。

「 いっー」

さすがにこの時はバトーーも焦り、振り返りながらオイル官を後ろに回し隠したが、いかにも何か隠しましたと言わんばかりの行動と一目瞭然。

そんな事にも眉一つ動かさない荒巻。

「少佐を探しているんだか」

バトーーは荒巻の目をあわせられず、キョロキョロと拳動不振な態度で言った。

「あつ、しょ、少佐は独自の捜査にでも行つたかなー？ あはは…」

「…」

「そうか」

荒巻はそう聞くとおとなしく去つていつた。

「あ、あぶねえ」

しかし、荒巻は去りぎわにボソリと呟いた。

「少佐にバレるぞ」

「…………」

バトーは固まってしまう。

「やつぱりバレた」

荒巻は長い廊下を歩きながら考えていた。

少佐はいつも事だらうが、トグサが“あれ”以来この捜査にやっけになりはじめたのを気に掛けていた。

2日前。

「本庁の知り合いから、気になる情報が」

「それに何か引っ掛かるのか?」

トグサには確信はなかつたのだろうが、些細な事から事件の真相を突き止める切つ掛けがあると感じるのは、地道な初動捜査を繰り返してきた本庁時代の“カン”が語り掛けていたのだろう。

「五日やる」

荒巻の決断は早かつた。

#05 (前書き)

年明け早々、体調不良に陥り更新が遅れたことをお詫びします。まだ、検査中ですので、度々遅れますのが御了承ください。元気な時も遅筆ですが……

#05・【マテバの弾道・5】

“五日やる”と荒巻から言われてから2日目の夜。明らかに妻子が待つ家には帰らず、昼夜を駆け巡ってきた様子の拘れたスース姿のトグサが大通りから少しそれた公園側に程近い場所にいた。

トグサはひつそりとたたずみ、薄明かりの中をえしく歩く。辿り着いたそこには『TELEPHONE』と上へ突起した看板の前だった。

「俺だ。やつと連絡がついた」

トグサはテレフォンボックスにもたれるように体を預け、受話器を耳に押しあて聞いている。

「相変わらずアナログ好きだな。公安行つても銃はマテバのリボルバー愛用してんのか！？」

「そうかもな」

へたれた返事。明らかに疲れている様子は相手にも伝わっていた。

「ちゃんとトラップ掛けたか？」

「抜かりはないよ。それより……」

電話越しの相手は本庁時代の同僚だが、電話では互いに名前を出さない手筈だ。只言えるのは、情報に長けていることと未だに本庁

内部で働いている」と。

「今回のはお前がへたばる程の事件じゃないと思つが、資料は田の前の公園ベンチ裏……ガツ……」

電話を切られた終了音は、トグサの疲れた体にやけに刺し凍みて足取りを重くする。

その様子を草場の影から覗くように、ショートカットの茶色い髪の女がひつそりとトグサを見つめる。しかし、トグサは気付いていない。

小さい公園内に錆びれたベンチが並列に三つ並んでおり、一つ一つ探つて歩いた。すると、真ん中のベンチ裏にフィルム製の滑る感覚を手に触れると、それを一気にむしり取り、中から封書を取り出す。

と同時に、トグサはベンチに重くのしかかった。そして手のひらを額から口元まで這わせると、せりうついた顎に気付き手を止める。

トグサは田線を地面の一点に向けじばりと固まつていた。

「ああ、家帰るかな……」

いつの間にか女の姿も消えていた。

#06・【マテバの弾道・6】

トグサは結局自宅に戻ることではなく、夫人に連絡を入れ、一先ず9課に戻ることにしたのだが、辿り着いた時にはすでに日が昇り始めていた。

「眩しいのがやけに気に障るな……」

トグサはいつのまに9課に辿り着いたのかもままならなず、その記憶を引きずりながらも一室のソファーに体を埋めていた。しかし、ボヤケ始めた断片の中でも触り心地の悪かった不精髭だけはその手にいつまでも不快感を残している。

(……髭剃つて寝るか)

何を夢見ていたわけではなかつた。風邪をひいたときのよくな怠さと頭を振り回された時のような感覚が苦しさを増長していく、夢でもないのに悪夢にうなされているかのようだつた……

ツ――

薄れた視界に荒巻の顔が映し出され、状況を瞬時には飲み込めないでいるが、体は飛び起きるように自然と反応していた。

「あつ、起きた」

隣にいたサイトーが座つて言つ。

すると、次々とモーターのあるその一室に、9課の面々が集い始めた。

「トグサ。気分はどうだ？」

いつもの顔の荒巻が、トグサに語り掛ける。その顔はどう見ても、気遣つているように見えないほど、無表情。

「あ、はい。大丈夫です」

「よし、ならいい。それから始めるが？」

その時、バトーがトグサの隣に押しつぶように座り込んできた。

「んー？」

トグサはむせ苦しみを覚える。

「なんだよ……旦那？」

「なんだはなんだ。鼻毛まで抜かれた面しゃがつて」

トグサは何のことだか検討すらつかなかつた。時としてバトーは、謎掛けのような問い掛けをしてくることがある。

「は、鼻毛？ なんだよそれ……」

バトーはにやける。

「フフン、俺にもわからんね」

「なんだよそれ……」

しかし、それにより少し肩の力を抜くことが出来たような感覚を、あまり擬体化されていないほぼ生身の体に感じ取ることが出来たのは、バトーのくだらないジョークによる賜物なのかもしれない。

「よし、各自報告だ」

荒巻の声がトグサにシマリと活氣を付けたのだった。

#07 (前書き)

誤り。#06の内容で擬体化と書きましたが、正しくは義体化です。すみません。

#07・【マテバの弾道・7】

「よし、イシカワ」

イシカワはモニターに解析映像を映し出した。

「少佐らが回収した車両から特殊なAIが使用されているのが分かった」

一同はモニターに集中しだす。

「この手のチップをつくれる人間は限られる。そこである機関の人々を割り出すことに成功した」

トグサは両指を絡め口元に運び、そして肘を膝の上へ置くとゆっくりと前かがみになりモニターに引き込まれた。

「今は存在しない研究機関だが一時期は大手メーカーからの信頼はあつかった。しかし、一部の幹部連中が無断で他国に情報をリークしたため、スパイ容疑で逮捕されて以降、その危険性から完全に閉鎖してしまつてます。その時の研究員の一人が消息不明になつてゐる」

「リークとは?」

荒巻が聞いた。

「思考戦車を高性能の兵器利用させようと、他国の独立派にAIの情報だけをリークしました。おそらく現物を国外に運ぶのはリスク

が大きいからでしょう。それにより国家への反逆罪の罪で服役します

「あぶねえ連中がいたもんだな」

バトーがぼそりと呟いた。

確かに企業や産業の技術スパイによる情報漏れは多大な損害にあたる。近年、さらに日本の技術は進歩をとげ、各分野においても飛躍している。（事件おきますけどね……）将来、軍事産業に本格的に乗り出したら、興味はあるとは言え、はつきり言つて恐い。

そして、モニターには不明になつた男の顔が映し出された。すると、大人しく座つていたトグサが立ち上がる。バトーはそれを静かに目で追つていた。

「名前は国坂栄一。三十六歳。三年前に妻とは死別。不幸にもその後、十歳になる一子がいましたが、事故により死亡してます。研究機関を退職後、コンピューター関連の職場を数奇にわたり転職したのち、半年前から軍で働いてます」

映し出された男は「ぐく普通の男に見て取れる。あまり特徴のない細面な顔に眼鏡という風貌だつた。

立ち上がつたトグサはその男の顔を脳裏に焼き付けるようにじつとモニターに食いついていた。

#08・【マテバの弾道・8】

荒巻はトグサに声を掛けた。

「トグサ」

一瞬、呼ばれたことに気付かなかつたようだが、耳には疎の声が届いていたのか、反射的に反応した。

「あ、はい」

バトーらは黙視してその状況を流す。

「最初に今回の暴走事件に関して犯人像や目的が極度にぼやけていて鮮明にはわかりませんでした。そこで、我々が危険性と何かを位置付けて行動をすることが逆に事件を闇に引き込んでしまうんではないかと考えました」

荒巻が問い合わせる。

「事件はもつと単純だと思うのか」

するとバトーが問い合わせてきた。

「確かに杜撰な事件だよな。大体、不明だつた身元も簡単に明らかになつたしよ」

イシカワが壁にもたれて割り込む。

「確かに。足で稼いできてくれたパズやサイトーが聞き出した元の同僚の一人から、作業員名簿が見つかってから明らかになった。コンピューター上の過去の記録が消されているだけで、現在の経歴は残されていたし、改竄された痕跡もない。後を追えないほどの使い手なら、杜撰というより故意に近いな」

荒巻は椅子から立ち上がりトグサに近付ながら話を続ける。

「うむ。そこで何か気に掛かる点があったのか?」

トグサはモニターに映し出された映像を眺めながら捜査状況を話はじめた。

「我々の管轄ではなく、もつと小さいところから何か関連性があるかと思いました。意外に見えない場所に綻びがあるのではないかと……」

バトーは眉間に皺を寄せながら、疑問符をトグサに投げ掛けた。

「お前、そんなことだけでワンマンやつてたのか?」

トグサは少し和らいだ面持ちを見せながらバトーに返す。

「その収穫があつたかどうかは分からぬけど、所轄管内で一連の騒動の最中、別な場所で多脚車両が目撃されます。被害が無いため事件性はないと判断され大事にはなつてないが

荒巻はこれ以上の情報線は「ない」と思ったのか、行動に移す事を選択した。

「よし。今回の事件は明確な姿を浮き彫りにせん以上、問答では解決にはいたらんようだ。犯人と思しき人物から当るのが懸命だらう……ところで少佐は何処だ？」

「このモニタールームに素子の姿はなかつた。

事前に気付いていたこととはいへ、割り出しに向つには素子が必要不可欠だと言うことだらう。チームプレーと言う言葉がないにせよ、このような状況下には居て欲しいところのが荒巻ら一同の本音だらうか。

#09・【マテバの弾道・9】

「少佐は自閉モードにはいったままです」

「仕方あるまい……」

9課内は徐々に慌ただしくなり始める。

「国坂自身、陸自の新型車両開発に携わるため県内の車両開発メーカーに所属命令が出てます。メーカー側と軍が共同プロジェクトの銘打つて開発するため、送り込まれてきたようです」

荒巻は動きだす。

「よし。バトー、トグサは国坂の身柄確保に迎え。パズ、サイトーは田撃車両の裏を。イシカワ、ボーマは引き続き国坂の情報収集だ」

「了解」

モニタールームから出でていくメンバーに鋭い眼光を飛ばしながら荒巻は一言言い放つた。

「国坂と軍の裏がとれん以上、上との繋がりが読めん。事は慎重に頼むぞ」

「……」

みな無言のままその場を後にした。

——開発メーカーに迎う車中のバトー、トグサは重苦しい重圧に押し潰されるような空氣かと思いきや、その様子は意外になく、荒巻が言い放つた言葉とは裏腹にトグサの態度は軽々しいものだった。それに気付くのに時間のかから無いのがバトーである。

「お前、親父がいつた言葉の信憑性は薄いと考えてるんだろ?」

「……確實にとは言い切れないけど、的確に我々の目を欺いてきた行動、それに伴う一連の動作に並列はなく杜撰な行動の切れ端も見え隠れしている。それに裏といつものではなく、単なる個人の目的を達成させる事に執着してゐようでならないんだ」

バトーはトロトロと走り回る車の間を縫うように愛車を転がし、
口元を緩めながら会話をはじめる。

「恨みや嫉みのような憎悪はどうなんだ? 例え個人の目的の為だとは言え、下手すりやテロの疑いだつて消えねえだろうが。そういつた類の事例だつてあるしよ」

「確かに。しかし、大本はそこには無いのかもしれない。何かのメソセージか? それを薄いベールに包み故意に気付かせようとしてるのかは分からぬ」

バトーの口元がさらに緩む。

「にしても食えねえ野郎だよな。研究所上上がりか知んねえけどよ、ああいう連中の頭の中身は電腦化の進んだ世の中でも俺には理解できねえな。と言うか理解したくねえけどよ。何にせよ、とつとと本

人に接見するしかねえな」

バトーが転がす愛車は着々と目的地に向って滑らかな軌道をその道筋にそらせて走っていた。

#009 (後書き)

後書きにて失礼します。私の作品は全てにおいて言われるまでもなく手抜きになってしまいます。お見苦しい点をお詫びします。言い訳は自己紹介文にて…

#10・【マテバの弾道・10】

「……ああ、国坂ね。彼なら今日は無断欠勤だよ。と書ひよりはもういいなかな」

トグサもバトーも意味ありげな言葉に眉間に皺をよせた。

「そりゃどう言つ事だ?」

「彼ね、上司のディスクの上に辞表じみた封書提出してたみたいだね」

「辞表?」

ズレた眼鏡を中指で直しながら、その研究員はかったるそつて牒る。

「そりなんだよねえ。彼、一応軍人でしょ、辞表出して忽然と姿消していいような職場じゃない。そりゃ一般的の職場だつて本来はそうでしょうが、軍人さんはそうはいかないでしょ。ましてさあ……」

永遠に続きそうな研究員の愚痴をよそに、バトーが荒巻に暗号通信で連絡をとりはじめた。

「“課長”」

「“ああ、聞いていた”」

「 “どうします？” 」

「 “偶然か？ 軍人である国坂が常識を知り得ずして辞職したとは到底思えん。どうなるか事ぐらい分かるはずだ。この状況下で姿を消すとなると何かを起こすのも時間の問題かもしれないな” 」

トグサは無言で荒巻の声を聞いていたが、心中は複雑であつた。大事にならないと思う反面、予想した予先がズレて、手遅れになつてしまふ事態になるのではないかという恐怖。トグサの掌はいつしか握りこぶしに変わつていた。

「 “よし。バトー、トグサはその場をすぐはらえ。我々が迎う事を察知しての逃亡かどうか分からんが、感付かれた可能性が高い。そうなると我々自体に危険を及ぼしかねん。これからはツーマンセルを徹底して行動に移せ” 」

「 “はいよ” 」

バトーとトグサは、まだ喋り終わつていない研究員に、 “ “じあな” と言わんばかりに手を上げその場から移動をはじめた。

「 “ところで少佐はまだ捕まらんか？” 」

「 “聞いていたわよ” 」

バトーが喋るうかと言つタイミングでいきなり割つてはいつきたのは姿を隠していた素子だった。

「 “今まで何をしていた” 」

「 “ ‘ めんなわこ。今までちよつとした手がかりを搜しにね…… ” 」

荒巻は無表情のまま田を開じる。顔色はは変わらないが、あきらかに呆れている。

「 “ 今はもういい。で、収穫は？” 」

「 “ あつたわよ ” 」

その自身有利な返答に荒巻は決断した。

「 “ よし。これからは、少佐の指示のもと行動に移せ ” 」

「 “ 課長は？” 」

「 “ ワシは念の為と思って国会に来とる。何かあれば隨時報告を怠るな ” 」

「 “ 了解 ” 」

やせじへ撫で付けるような素子は課長との通信を終えた。その後、即座に指示を出す。

「 “ バトー、トグサは一田引き替えせ ” 」

「 “ 了解 ” 」

通信を終えた後、バトーとトグサが顔を見合わせる。

「今まで何処行つてたんだかな……」

二人はそのまま一旦、9課に引き返すかたちとなり、来た道を淡々引き返した。

#1-1 (前書き)

初歩的なミスがありました。申し訳ありません。

#111・【マテバの弾道・11】

その日の街はいつも夜だった。夜に溶け込むように課のメンバーが息を潜める。

“国坂確保を優先し、各自任務遂行を図任せ”

「ん！」

バトーは暗号通信中に何か違和感を感じていた。それを素子に伝える

「“少佐”」

それには素子自身も気付き、さらにそれを意図するものも感付いていたようだつた。

“課長。この件に軍が介入する確立は？”

“ゼロではない。何を自論んでいるかは国坂自身を確保しなければわからんが、先を越されれば闇に伏す。言わんでも分かるだろうが、そうなれば我々の苦労が水の泡だ。流れを崩すな”

バトーの眉間に皺が寄る。

(どうりで一特定の通信を聞くとノイズが紛れるわけか)

“よし。目標が確認できしだいいけ！合図はまたんでいい”

すべての準備が整い、後はその時を待つだけだったが、それも時間の問題で前兆とも言える兆しが始まった。

遠くから車のブレーキ音が数台に渡り、響かせ始めたのだ。

「“標的直視！作業用の車両暴走中。いくぞ”」「

と同時に待機するタチコマ数機に指示をバトーが出した。

「“タチコマ、ライン上から外して標的を停止せしろ”」「

ラインに姿を出した標的に向け、光学迷彩を起動させたままタチコマは跳ぶ。

「“了解バトーさん。任務すいこーう”」

間の抜けた返事にバトーは嘆く。

「“緊張感ねえよなまつたぐ”」「

「“バトーさん。僕達は特定された個々の個性と言うものではなく、並列化されたシステムの中で生まれ、ゴーストも持たない単なるメカでしかないのです。それに緊張感を求められるなんてバトーさんはメカ的なニコアンスになっちゃつたんですね”」

それには長い言い訳を返すこともなくニヤケて一言だけ呟いた。

「“少佐に怒鳴られるや”」「

「“しょえ～。責任をメカに押しつけるなんて死活問題だあ”」

そうもよきながらも、タチコマは標的に向け、特殊なワイヤーを張り巡らせ、その車両をライン上から反らせ停止させる。それを確認するなりバトーは直ぐ様首下の接続コードを伸ばすと探査ウイルスを流し込んだ。

「“よし、イシカワ、ボーマ頼んだぞ”」

バトーの流した探査ウイルスにより、遠隔リモートで暴走車両を操る国坂をいぶりだした。

操作される車両の半径内にあるビル群の屋上にいた国坂は防壁を張る前にその姿を暴きだされ、その半透明だった全貌が徐々に浮きはじめた。

「“目標直視。照合と一致、国坂本人です”」

「“よし。サイトーが先回りする方へ流し込んで追い詰めろ”」

「“了解”」

任務が着々と遂行される中、バトーは考えていた。

（後は少佐とトグサにまかせるしかねえな……しかし、今回出番ねえな俺）

そして停止した車両にもたれながら、高く聳えるビルと光り輝くその光景をただ見上げている。

今回の事件は完全に少佐の掴んだ情報と詳細が的確な迄に目的を得ていたのだった。それは、バトーとトグサが開発施設から引き返したその日に現われた茶髪の女性によって明らかになっていた。

#1-2 (前書き)

諸事情により更新が遅れました。もう数話で終話ですが、またも
しばらく更新が遅れます。申し訳ございません。

#12【マテバの弾道・12】

トグサは夜の暗がりの中、マテバのリボルバーをその両手に握り締め一点を見つめていた。目標が網に掛かるのを待ちながら。

素子からの支持で一旦戻ってきたバトーとトグサは認証式ロックの扉が開かれた瞬間、銃に手を差し伸べた。

扉が開いたモニタールームの中心に白のスース姿に茶色い髪の見知らぬ女性が立っていることに気が付いたからである。

「何者だアンタ！ 9課の認証コードどうやって盗んだ？」

9課内は「コードがなければうろつく事は出来ない。そこに見知らぬ人間が勝手に居ることは、無論、頭に銃を向けられるのは必然である。

「あら。貴方達の為に必死に情報を搔き集めてきた人間とレディーに対するマナーがなつてないわね」

そう言いながら茶髪の女はソファーにふてぶてしく座り、足を組んで微笑んだ。

すると、何かに気付いたのかバトーの強張った顔の筋肉が徐々にゆるんでいく。

「ま、まさか少佐か……」

その時、バトー等が背にしている扉が開き素子がいつものスタイル

ルでのうのうと入ってきた。

一瞬驚きはあつたものの、それが素子だと分かると一人は銃を収めた。

そしてバトーは親指を茶髪の女性に指差し言った。

「ありや『テコット』（リモート義体）か

ソファーに座つた女はいつのまにか、魂が抜けたようになだれていた。

「俺が居たからよかつたものの、トグサ一人だつたら99コの餌食になつてゐるぜ」

バトーは冗談混じりにニヤケいた。

「しかしレディーに対するマナーなんてよく少佐が言えたな」

「あら。捨てたもんじゃないわよ。今回はあの方が都合が良かつたのよ。同時にトグサの行動も張る事が出来たわ」

トグサは張られていた事を知り、田を見開いて言う。

「少佐、張つてたんですか！？」

素子は一人の間を割つて入るように歩き、自分の『テコット』に近付きながら話した。

「貴方がどうしてワンマンを張るのか。そして事件に疑問を感じたのは一人ではなかつたつて事。当事者だから語れるものもある。貴方の友人が一番よく知つてゐるんじゃない？」

トグサは驚いていた。

「まさか、本庁から情報を流した彼が……」

「直接事件に関する質問してなくとも、答えは知っていた」

「気付くのが遅かったとは言え、トグサは自分の部外な方に肩を落とした。

するとバトーが肩を軽く叩くと、

「そうなるのはまだ早いんじゃねえか？ 事件は解決してねえんだしよ。強ち投げ掛けた疑問符つてやつが目的を外れたわけじゃんだからよ」

その言葉には素子も同調した。

「そうよ。国坂確保、又は自身には何が必要か？ 貴方の得意分野でしょ。本庁から引っ張つて来た事を後悔させないでくれる」

トグサの目の色が見る見る変わつていいくのを素子やバトーだけではなく、もしこの場にメンバーが居たら誰もが感じる事が出来ただろう。

「さあ。全員召集をかけて。ガレージのタチコマにも手伝つてもらわないと。課長の決意を無駄にして私たちの存在意義を問われてしまふわ」

その数時間後、トグサは任務用のボディースーツに身を包み、マテバのリボルバーを握り締めることになったのだ。

#1-3 (前書き)

前回予定していた通り更新遅れました。申し訳ありません。忙しいので荒削りに2話投稿しました（13話、14最終話です）。

#13・【マテバの弾道・13】

トグサはこの現況とこれから始まる事態に妙な緊張感に縛られるようだつた。

「て、手が震える」

素子はトグサの心境を見透かしたように暗号通信でサイトーにシタクトを始める。

「“サイトー。アンカー式ライフルを装備し、ポイントで待機だ”

「“わかりました”」

「“標的のスペックが解らない以上、最終的には止むを得ない。合図があれば躊躇わざ潰せ”」

イシカワ等が国坂を車内に押し詰め、その場で待機していた。

「“バトーも接触ポイント付近でタチコマと待機。零れた時は頼むぞ”」

「“了解”」

トグサは未だ緊張の糸が張り詰めたまま、路地付近の薄明かりを一点みつめている。
そんな時、アスファルトに金属を叩きつけるような鈍い音が微かに聞こえ始めた。

「的中した。来るぞトグサ！」

近くに身を隠していた素子がトグサに荒ら声を叫きつける。

トグサはマテバを両手にしつかりと馴染ませていた。

その時だ。街灯に照らされるように軍用多脚戦車が不気味にゴジゴジとした輪郭を浮かび上がらせる。

瞬間！ 素子が叫んだ。

「トグサ、回避しろ」

しかし、トグサの指はリボルバー銃のトリガーをすでに引いていた。

9ミリの銃弾がビルの狭間に共鳴しながら弾け飛んでいく。

「サイトー！」

素子の怒号とともに団太い銃弾が金属を抉りだした。

軍用戦車の脚が脆くも吹き飛びバランスを崩し始め、火花をチラシながら地面を滑る。

するとつっ立つたままのトグサが得体の知れないなにかに吹き飛ばされ路地の影に転がった。

戦車の前には光学迷彩を纏つた素子が姿をあらわし、トグサは素子に蹴り飛ばされたことを知る。

「少佐……」

素子は素早く戦車に飛び乗り、振り回されながらもA.Iが内蔵されているハッチ部分をあけ、暗号コードを流しだす。

デジタル数字の「コード計」が一つ一つ数字をはじき出し、「コード」を解除。ハッチパネルがじわじわと開き始め、その全貌を表した。

「これは…？」

素子の皿には明らかにそれと解るモノが映っていたのだった。

#1-4 (前書き)

最終話です。少しだけ長めです。

#14・【マテバの弾道・14】

そこには大人のそれとは違う子供の脳がAIに接合されていた。

「なんてことを……」

素子はすかさず首元のコードを手に取り、保護用のウイルスを流そう接続をした瞬間だった。

「パパ……」

その声が脳裏を過ると共に、

——ボンッ——

小さな着爆音とオレンジ色の火。それは誰の目にも明らかに焼き切られた瞬間だった。

蹴りだされた衝撃からか、すっかり我に返っていたトグサはそれを目の当たりにしてしまった。

完全に命の燈を消してしまった鉄の固まりと淋しくもその小さな脳も一緒に果てていた。

「少佐。これは……」

突如、鬼とも呼べる形相を浮きだしたトグサはその場から掛け出しが始めた。

めったにないトグサの表情からその意図を読み取った素子がイシカワ達に慌てて伝える。

「国坂を保護しろ。トグサが殺しに向かつた」

「了解」

トグサにしては珍しくも感情的になつていたのである。

数分もすると決して現場から近いと言えない距離を全力で掛けてきた事が明らかに、息も荒々しくトグサが国坂の前に現れ、手にはリボルバーが握られていたのがイシカワ等の目に見えた。しかも銃口はすでに国坂に向いている。

ずんずん前に向かつてくるトグサを必死に止めたが、この時ばかりはトグサも抵抗し、押さえ付けている手が離れたら瞬時に国坂を殺しかねない勢いだった。

「国坂あ――――！」

一瞬の隙だった。

ボシュッ

リボルバーから銃弾が発砲された音と重なるような音が二つ。それは国坂が乗る車のガラスが割れる音とトグサの頬をバトーが全力で殴り付けた鈍い音。

マテバのリボルバーが放つた弾道は国坂から外れていた……

数時間後。

議事堂から戻った荒巻と素子が顔を合わせていた。

「これは何かに注目を集めたかつただけの事件ではないだろう。主は問題定義を表面化したかつただけかもしかんな」

素子は壁にもたれ、目を閉じ腕を組んで話はじめた。

「比較的古いタイプの戦車が現れて安心したわ。新型なら私たち今は今存在してないかも」

「……」

荒巻の安堵な表情は表向きにはわからない。

「例え古いとはいえ、戦車が街中で暴走させたのはまずいわね。これから恐慌でふためく軍の動きが楽しみだわ」

「つむ。今回はテロへの関連性は見れず、安易に位置付けはできんが、一步間違えれば大事では済まなかつた。しかし、それを未然に防げたのは安堵だな」

二人は一瞬間を空け、荒巻が再び口を開いた。

「……トグサの様子はどうだ？」

「家に帰したわ」

「今回は奴の心に鈍いものを突き刺したな。少し家族の事を考える時間も与えるのもよからう……」

すつかり頭を冷やしたトグサはまだ明け切らない夜に埋もれた、部屋の薄明かりのなか考えに耽っていた。家族はまだ夢現つの中にいる。トグサもまた心中でもやもやの自問自答を始めた。

「“軍の裏の顔を露呈しようと田論んだ国坂。と同時に不慮の事故により辛うじて生き延びた息子の脳を戦車に繋ぐ行為”」

パソコンのディスクに持たれる妻の顔を見届け、トグサは静かに別な場所に足を進める。

「“おそらくは軍内部でタ力派の連中による産業などに携わる何かの田論みに気付いたのだろう。大方、予想は付くがもみ消されるに違いない。虚しいと言つべきか？”」

トグサがスライドドアを静かに開けると、小さな薔の様な子供がベビーベッドの中で静かに寝息をたてていた。

「“あの時は怒りが感情を支配していたなは間違いない。幾ら子供が望む夢だからと言つて……幾ら体を失つたからといって他にも選択肢はあつたはずだ”」

トグサは表情に現れたように心境は複雑な色を混ぜ合させていた。

「“もしさうなったとき僕はどんな選択をするだらうか？ 今は考えるなよそつ……”」

子供の寝顔を見た後、ドアを静かに閉め、テレビのスイッチを付けた。

しかし、いつの間にかトグサの疲れた体をソファーが眠りへと誘っていた。

END

#1-4 (後書き)

この度は攻殻機動隊のFF作品を読んで頂きありがとうございました。全体的に荒削りで雑になり、不定期更新により読者様には大変なご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3089a/>

KOUAN.9-KA【マテバの弾道】

2010年10月9日00時24分発行